

藤原茂明論攷

もちあきら

——『本朝統文粹』編者の可能性——

松田和明

「キーワード」①院政期文学 ②篇数の遷移と保延六年の茂明

③感緒 ④『無題詩』の編者 ⑤長兄を見込んで

はじめに

中古中期に藤原明衡が文章編纂書『本朝文粹』を編刪したことが、近古前期に成立した『本朝書籍目録』類聚部に記され、明衡が同文粹の編者であることに異論は在らぬ如くだが、保延六（一一四〇）年以降には其の統編たる『本朝統文粹』（略称・統文粹）が成立した。『統文粹』の編者が誰かについては元禄十三（一七〇〇）年に橘見林が「本朝續文粹序」に於いて『書籍目録』に「季綱撰」と表記されることから、南家の藤原季綱であると断定した。此れが長らく定説となっていた如くに在るが、藤原宗忠が時事を記述した日記『中右記部類』の康和四年第九十四条項に拠り、季綱の逝去が康和四（一一〇二）年爾前と考えられ、『統文粹』には明衡の嫡男である敦光の保延六年の作品迄所収することに拠り、編者を季綱に充てるのには無理が在る。既に明治初期には岡本保孝の随筆『難波江』に「季綱

か」との疑問性が提示されている如くで、昭和四（一九二九）年には岡田正之も『日本漢文學史』に於いて「書籍目録に據れば」と相対性を提示、「續文粹の編者に關して少しく疑ふ所を開陳せんとす」と考究課題も掲げ、而して近世前期のうちに儒学者林羅山と鷲峯の父子が編者に言及していぬと、岡田が「季綱の撰と認めざりしものにあらざるか」とも叙べる。昭和十一（一九三六）年には和田英松が『本朝書籍目録考證』に於いて康和以降の作品は何人が増補したかと、就中敦光の作品が四十五篇を占めることに拠り、「或は敦光の一族などの補ひたるものなるが如し」と叙べ、昭和二十八（一九五三）年に到り川口久雄が明衡の長男敦基の嫡男の一人で、藤原宇合を曩祖に明衡爾来の儒統たる式家を継いだ藤原茂明の辺りが撰したのではと異論を呈した^{註1}。挟んで昭和三十三年（一九五八）年の山岸徳平「本朝統文粹解説」（内閣文庫本所収）に於いて矢張り茂明が編者であるかの推定として強調されながら、川口に到つての独創

的な学説に拝承でき、斯くして平成十三(二〇〇一)年に到つて佐藤道生が其の説明附けを呈していることもあつて、^{註2)}茂明を中心に論考する価値が高いものと確信する。

一 茂明編者説

元来『書籍目録』が端的にも編者を季綱であると表記する主観的土壤に於いて、川口が『続文粹』の編者を茂明迎りかと思論を呈したのが本学説の奔りと云い得る。而して佐藤が叙べる如く『続文粹』と一対を為す書冊に平安朝漢詩集『本朝無題詩』が有つて、佐藤は『続文粹』が明衡の『文粹』と決定的に異なる点は、藤原式家の作者を優遇し包摂する点に在ることを踏まえた上で、明衡爾来に於いての式家が『続文粹』編纂時に在つて儒者を少なくとも三世に亘つて輩出していることであろうと叙べる。佐藤は『続文粹』原撰本と粗同時期に成立した書冊が『無題詩』で、此れも同じく式家儒者の手に拠つて編削されたもので、而も作者は三十名に上り、就中、儒者としての活動を確認できる者は十九名であるが『続文粹』に観えぬ作者が居ると云う。其の作者は菅原時登、藤原宗光、藤原実光、藤原顕業、藤原茂明の五名で、前者四名は他家の出身という理由で撰者が四名の作品を採らなかつたことが十分に考えられるとも叙べ、其れでは何故、式家に在る菅の茂明の作品も一篇たりとも所収されぬかとの疑問も投げ掛ける。此処に茂明が編者に最有力であるとの学説が明確化することになるのである。此処では茂明が式家に在るといふ主観性も、茂明作品が所収されぬといふ客

観性の枠組みに繋がり包摂することになる。所謂間接的性質たる高所の位置にて拝観することに拠り、異論を抽くに到らしめんとする学説なのである。川口にしてみれば多分大江匡房の作品が二十三篇の所収と篇数が許多にも極少にも有らぬことからか、匡房を包摂するかに大江氏の何れかが編者ではないかとも叙べるが、真逆にも匡房の辺りを充てていたのでは依然として未だ間接・客観性を掘鑿していぬとしか云い得まい。縦令、匡房が天永爾前頃の生前のうちに『続文粹』の初編者であつて、以降に続く新編者の増補が在つたとしても式家に無ければ此れも主観性であることを否めまい。確かに式家にも限らず藤原氏では在らぬ者という点には客観性を観て採れ、匡房が乃父の維順や其の次男の維光にも編者の可能性が在るものかもしれぬが、式家抜きには考えられぬ程であろう。而して、川口に到つての茂明を編者と観立てる点、正に季綱と対峙しての『続文粹』を編者未詳と相殺するに追い込んでいる仮説ではないか。

二 茂明の生涯

明衡を祖父とし、敦基を乃父とする茂明は、長兄に令明(承保元—康治二)が居て、叔父に敦光(康平六—天養元)が居る。承保二(一一六二)年以降に成立した『本朝無題詩』には五十七篇の作品が所収され、此れは敦基の養子で茂明の義弟である周光の一〇一篇を筆頭に、法性寺閨白の忠通の九十一篇、中原広俊の六十九篇、敦光の六十五篇に続いて数多のものである。忠通の詩友には忠通詩壇の構成員として周光や茂明が近侍、長

治元（一一〇四）年の中に前因幡守藤原公明邸にて詩宴が催行され、茂明は学生として同席している。既に元服前には述作に精通していたらしく、茂明の生歿年は未詳だが、同年が元服前の最高年とすると、茂明の生年は数え十二年遡求しての寛治七（一一〇九三）年との推定が可能に在る。乃父敦基の歿年は嘉承元（一一〇六）年であるが、長治元年の先の詩宴には乃父の敦基、長兄の令明、叔父の敦光も同席して、三人とも『中右記部類紙背漢詩集』に所収される「白雪庭松に満てり」の詩句を一篇ずつ詠んでいる。京都国立博物館所蔵『白氏文集』古写本は、嘉承二（一一〇七）年に茂明（名義は知明）に拠って書写された。何分に漢文が男子の文学であった時世、元服前とて単に書写する程度のうちにも俊傑にはなからうが、其れは本朝で初めて書写・加點された『白氏文集』の古写本である。年少期にして偉業を成し遂げた茂明には先験的であるかの才能ぶりが認められる。『紙背漢詩集』には、元永元（一一一九）年述作の「酔ひて唯、春を送る 十五首」中に「学生茂明」としての一篇も観えるが、其の時の詩宴は茂明の文亭にて催され、出題者も茂明であるとされる。敦光が撰者であるかの散文に拠る『詩序集』も有って、本冊の作者は学生、散位、任官者の肩書に概され、詩序の末尾の段では、序者が己れの感懐を抒べることを許諾されているものの、作者二十八名中十六名を占める学生が一樣に任官を待望していることを、嘉承二年から保安元（一一二〇）の中に挙行されたと推定できる左中将藤原忠宗の催行する詩会で述作した詩序の「月明貴賤家」で茂明は叙べている。茂明は

更に保安三（一一二二）年には文章得業生に在って、天治元（一一二四）年に得業生に課す官吏登用試験の対策に及第、大治二（一一二七）年には下総守を務める旨を『中右記部類』に記す。『無題詩』には其の卷十所収の茂明「城北精舎に志を云ふ」に「齢を顧み、四句に垂る白首」という詩句が有って、既に四十路には懐思の想念を抒べているが、同卷六には藤原広俊、敦光、茂明、周光の四首から成つての陶化坊に遊び其の秋景を賞翫した詩句が有って、四十路に入つていたと考えられる茂明は、寺門に遊ぶも春の時節を惜しみながら一日の黄昏時に及んで「榮枯の異るを識り」、暫し「洞裏」に在って「毀譽の喧しきを忘れ」と素懐を抒べている。『無題詩』の「山寺」部、殊に「山寺下」には浄土教信仰の瀟愴が顕著であつて、不惑の茂明も例外ではなかつたのである。久安四（一一四八）年の閏六月には鳥羽天皇逆修の法会の折の願文、翌五年には同天皇が般若経を写経する折の發願文、仁平元（一一五一）十月には十樂曼荼羅供養の折の願文を記述しており、猶も信仰性が瀟愴していたらしきには在るが、忠実に官職を遂行していることも復確かである。

茂明の「暮春、城北精舎に遊ぶ」（無題詩卷十）には、「身を顧み、已に六句の算を過ぐ。子を挙げ、須べからく累葉家に傳ふ可し」の註に、「息男敦経、学問料を望む。故を云ふ」と有つて、茂明の子敦経が令明と共に、仁平三（一一五三）年五月に学問料の試に應じており（宇槐記抄、古今著聞集）、同年は茂明の傘寿以前と考えられることから、右茂明の「六句の算を過

ぐ」は仁平三年由り十数年前の耳順になったばかりの頃の詩句と考えられるものである。『無題詩』巻二の「艾人に賦す」は茂明が耳順を詠じた詩句であつて、端午の節句に邪気を除ける用途の蓬生の人形の容顔が氏性や種族を問わずの中で茂明の我に似ていると云い、元服前由り述作に在つた純心な我を忘れ得ず懐思しているのだが、雨水が虚いかな水溜りに高を増すのを目視しながら、耳順を迎え衰え往き、恰も晩年を思慕させるかに寂しい限りと抒べる。氏姓や種族を問わぬと云うことには氏族制度に捕捉されずの恰も主権在民的、大陸友好的な刷新性たる知覚認識を拝承できるが、とうに端午の節句に祝福を授かる歳時の記憶は極薄のもと、単に気分転換であれば治癒可能かの祈禱こそ効能を示さぬうちの疫病に何時罹るも特殊でない老齡期を迎え、躍動感の劣化した己れに捕捉追従され艱難辛苦なる想念に喘いでいたことも復事実である。而して巻三の「八月十五夜の月に翫ぶ」を謁見すると耳順の茂明は白髪を被つての閑居に在つたらしく、冷たい秋風の吹く中、中秋の名月を賞翫しながら詩句を詠じては心が耐え凌げずに痛むことだと抒べる。此れに在つては、徐々に衰え行く中で己れを抑制せんとする慎ましき感覚さえ鈍化し、恥辱にも長年堆積されて来た辛苦の想念を覆い隠せぬ茂明が煩悶し始めている。「暮春、城北精舎に遊ぶ」には疲弊を覚知することに抛り身体の衰えを免れられ得ぬと感嘆するかの、腰椎が歪曲して杖具を衝いていた耳順の茂明が在つて、同巻十の「九月盡日、城北精舎即事」には風儀を過ぎ去つた趣に看做せぬ中、去り往く秋を吝嗇しながら懐旧心

の捨て難い耳順の茂明が居る。仁平四（一一五四）年八月には金剛心院供養の祝願文を記述して信仰性に抛擲し横溢していたらしきには在るが、同年二月に遡求して茂明は藤原氏直營の教育機関である勸学院の修築竣功の節に催行された祝賀に参席した。杖具を衝いて歩行も儘ならずの身の不自由を振り払つての参席ぶりであつたが、藤原氏の一人に在る茂明にも毅然に勸学院の学生に在つた時期が有つて、躍動感漲る若かりし日々を懐思するかに順風満帆の想念に浸り、更なる己れの飛躍を熱望して居たのかもしれない。

仁平四年の改元の勘文を草した三人のうち一人は茂明である（他の二人は式部大輔兼加賀守藤原永範、文章博士兼越後守で敦光の子長光。久寿改元定記）。『無題詩』の茂明作「夏日山家即事」（巻七）に、「七十年來、衰え去るのち。往事を懐かしむ毎に涙先ず霑つ」と有つて、天命を知る茂明ではあるが、最早衰えを隠せぬうちに昔日を感懐し感涙に嗚咽、悲嘆に陶酔する己れを抒べている。乃父敦基並びに実兄令明の歿年と義弟周光の老年（古今著聞集には保元三・一一五八年が敦光の歳八十ばかりとある）とを考えて、令明が六十路半ばであつたとすれば、茂明は仁平四年には七十路半ばであつたと推定される。「夏日山家即事」は茂明の従心の頃の述作と観られるが、同題の弟周光の詩句には「耳従」と有ることから、此れが茂明と同じ時期の述作であるとすれば、茂明は周光より十歳程年長であつたことになるが、令明を包摂しての三兄弟の歳の差は五〜六歳程であつたとも推測され、斯くして茂明の詩句は老年に到つての述

作が許多に亘るとも看做される。

懐悔の想念に耽溺する茂明であるが、『無題詩』巻九には「春日、法輪寺に志を云ふ」の如く詩題の一篇が有る。茂明にとつて「京洛囂塵境」に対比されるのは「梵宮」で、貴族官僚の京洛は喧騒の俗塵であつたことに気兼ねして、京洛を乖離して山寺に「優遊」することのうちに自由であつた。貴族とて微官ゆえの辛苦にも測り難いものが在つたに違いない。「囂塵境」とは微官の者が容易に離脱し難い貴族官僚社会で京洛の中核でもあるが、「自由」を剥奪する桎梏社会であつたゆえ、山寺に在つて酒を酌み詩句を詠じ、帰郷をも忘却する程に酔い痴れることが解放と安息を見出す逸遊なのであつて、「梵宮」への出遊は歎ぶべき自由の閑暇だったのである。^{註6}

『無題詩』巻七の「夏日山家即事」を述作した晩年の茂明には、同巻五に「聊か閑中の偶詠と成る。老後の惣吟に慰むる己れ」の如く的一篇も有る。従心に到つて茂明は「官職を抛來し」、剃髪して薜袈を纏う身となつたらしい。自らを「一桑門の老」とも称している。祖父明衡の蹤を受けて学路を歩み続けた自らを省みて、「一傭儒」と観なくてはならなかつた自嘲は、「傭しき微身を顧み布鼓に同じ。試るも愚慮を磨き、鉛刀を以す」（巻四、早夏述懐）の如く言葉にも明らかであつて、「一日憂いを忘れ、濁醪に酌す」と云いながら、箕山に隠れ潁水に耳を洗つた許由に倣つて隠棲を素意としたが、忠孝の羈絆ゆえに今日まで遁れ得なかつたと云うのも虚飾ではあるまい。「鬢髮、年年々老白を迎ふる」、「生涯、空暮れて水の如し。学路、通無く山燃

り嶮し」（巻十、雲林院即事）、「官途趁拜の宸、辛勤に倦む。

学海嶮難、子細に諳く」（巻五、歳暮に志を云う、第一首）。茂明にとつて生涯は長い辛苦の道程でしかなかつた。「蜚雪幾年、学を嗜むと雖も、箕裘三代、躬を抽かず」（巻六、秋日林亭即事）と云い、「翰林、老いを送り、齡空しく。魯禺宦学、此れ鼓顔」（巻十、歳暮東山禪房即事）とも云う。微官として辛勤しなくてはならぬ嘆きは深く、「老鬢院、蹉跎に齡、已に暮れ」と知りながら酒盞を交わし詩句を制し、「多年、貧にして道に嗜み咲くこと莫れ。人間名利、貪るに能わざる」（巻五、歳暮に志を云う）とも云い、其れは長年貪しくも徳行を嗜み潜り抜けて来た生涯を自嘲と諦念で以つて省みるものであつて、「林を思ふ籠の鳥。水を失ふ轍魚」の苦痛と悲嘆でもあつた。^{註7}老いて我を顧みて、込み上げて来る苦諦の想念に犇めく茂明の心情は、明衡と憤悶を共にするかの読み手の心情に苛烈にも伝わり来るものではないか。『台記』巻十二、更には近世前期に彰考館の史臣に拠り編纂された『本朝文集』にも所収する如く、久寿二（一一五五）年四月には「藤原頼長が左丞相を辞する表」を、同年五月には長年仕えた頼長に感服の意を表する追記文「第三表」を記述する。茂明は若かりし時期由り日々精進に励行するも、頼長は茂明燃り遙かに年弱であるのに左大臣をも歴任した訳である。茂明は決定的に己れが窓際の未熟者だと不協和に陥る側方も覗かせていたかもしれぬが、官職に在つて免れ得ぬ老成とも違い、而も晩年に到つても述作の才を奮っているのであつて、其処に躍動せんとする生命が息吹いている筈である。

茂明は久寿二年十二月に雅仁親王即位の大嘗会が催行された節には次の如くの和歌を述作した。

結びあぐる 松井の水は 底清み 映るは君が 千代の陰
かも

吉備国の一区域、頃日の岡山県総社市の備中国分寺跡の近辺には其の句碑せうが有る。茂明の吉備国との関わりについては斯くの句碑しか有らず未詳に等しいが、漢文のみでなく和歌にも秀でる茂明の側方を拝承できる。「松井の水」は傍側で男女が嬉曳きに待つ井戸であったと考えられている其の湧水で、頃日こそ枯渴して汲めずだが、井戸の直ぐ周辺には樹木の松も生息していたのかもしれない。茶屋を営んでいたという旧松井家の所有であったかもしれない。茂明が松井の井戸と如何程の関わりであったのかも未詳に等しいが、大嘗会の席上で詠句した程に其の高名たる井戸を瞻仰していたことは確かである。高名に在るからにも絶え間なく湧水いずるを願わんとする井戸を掛け簷え、恒久に亘つての世中社会全域の安寧と、即位親王の深く誠行たる在位への所期願望が込められている和歌であることも復事実である。

茂明は永暦元（一一六〇）年十二月に美福門院追善の為の表白を執筆しており、仏象性の窮まるかも応保頃迄生存していたと観られ、文人としての全うを遂げ荣誉に在る。

三 『紙背漢詩集』と『詩序集』の茂明

『紙背漢詩集』は昭和二十八（一九五三）年に川口が、学界に於いて其れ以前に全く知られていぬとして着眼した書冊である。佐藤も大変重要な書冊として評価、川口が本冊に従前由り総勢二百四十一名の作者の漢詩の所収が知られるとの伝承性を叙べ、就中、百六十五名の作者が知られぬとも叙べるが、本冊には茂明の作品が計二篇所収される。川口が茂明を極少なりとの作品数に抛り知られぬ作者の一群に数えていることも行間でき、其れは近世に到って成立した編書『日本詩紀』や『本朝文集』に所収されることに抛り知られる作者であると云う経過的意向の處であつて、形成的過程に在つての浸透性なるものとして拝承できる。遡求して院政期に成立する『紙背漢詩集』であるが、漢詩文について大治元（一一二六）年の「月明酒域中詩」を本冊中の最古作品とする中に於いて、予め宗忠が寛治元（一〇八七）年から保延四（一一三八）年に到る迄の時事を書き綴った日記『中右記部類』が成立しているのであつて、其の紙背に恰も註釈・補説・追記の如くに書写されたと憶測できる蒐集と云えるものではないか。『中右記部類』の書写時期の上限である寿永二（一一八三）年爾前には成立したものと考えられ、川口に抛れば恐らく大治を去る遠からざる時期には編刪したとも叙べている。

さて、茂明の作品は『紙背漢詩集』に二篇であつて、此れは『無題詩』の五十七篇と比せば極少である。側方、編者が作者

について何らと意識せず、部類（天象や山家、厨房等の区分。両文料に於いては文章の種類に置かれるが、無題詩では巻数の次列に位置し、卷十迄に三十七の部類から成る。部類は「題」と「詩題」の次元とも異にする）等に拠りながら専ら作品に拘って編削したのかもしれぬが、極端な数差は確かに気になる。處で『紙背漢詩集』の編者は川口に拠れば宗忠・周光・宗成等が考えられ、周光は『無題詩』に作品を一〇一篇所収されるも、『紙背漢詩集』には全く所収され得ず、宗成は宗忠の嫡男で一篇のみの所収で、中古初期の北家の一人の藤原宗成とは異にする。宗忠の『中右記部類』は川口に拠れば鎌倉極初期に成立、元は僅かに仏事部類と郁芳門院凶事記の二巻のみが知られ、二百冊以上有ったとも知られていたが、終戦になってから九条家の秘庫から此の部類十二巻が出現、百数十冊が存在しており、十二巻に亘つての卷子本の料紙の紙背の一部に古逸の未知の漢詩集断簡が書写されていたものである。『中右記部類』が確かに大部に亘つていたことを鑑みると、茂明の二篇など微塵にも有らぬかだが、某かの別なる編書を繕くことに拠り散文集たる『詩序集』が有るのである。長承元（一一三二）年に降に成立したと知られる本冊は、判明する二十九名の作者に拠る四十六篇の詩序文が所収され、就中、茂明の「月明貴賤家」の詩序が所収されるのである。前漢武帝の治世、首都長安附近の良家を嘲笑して迄凛々たるに鼓舞した富豪系の官人に好感をいだき、詩豪や文豪は社交の場を好み呉々も得意気にならぬとも抒べる茂明の気品さの窺える作品であるが、『詩序集』に茂

明の一篇のみの所収が本作品である。此処では「詩序」のみの文章の種類で茂明に絶つて好いものか、此れでは詩句の相応を認めていぬではないか。斯く云つて茂明には前掲の願文や「御齊会講師表白」の如くの作品も有るのだが、仏性的厭世観にも捕捉されるかに、茂明が編者であるという接点に繋がらぬものなのである。

畢竟、茂明の所収作品が僅少に有る中で編輯進行上に在つての一種の経過点に気づかぬか。『紙背漢詩集』に迄遡及することに拠つての、茂明の『続文粹』編者の可能性である。『紙背漢詩集』の成立時期の下限が大治元年で此れに二篇、『詩序集』の成立時期の下限が長承元年で此れに一篇、而して保延六年の頃に成立したとされる『続文粹』には一篇も所収されず、拠つて成立の順を追つて過程的に一篇ずつ減少するではないか。『中右記部類』は頃日も猶、多かれの篇冊の存在すら確認できぬものの、多分其れ等に『紙背漢詩集』の断簡の続編なりが書写されているのかもしれない、諸本を仮定する等で頃日の時点に於いて茂明の作品が『紙背漢詩集』に少なくとも二篇以上は所収されたのが確かなのであつて、而して其れが何篇以上に亘り所収されていたとしても、元より最初から『詩序集』には一篇のみであると仮定することで、『続文粹』に到つて茂明作品が零篇ということとなり、此処に茂明が編者であることが単に所収されぬと叙べる然りも更なる論拠性を帯びるのである。僅か一篇や二篇、時として数篇の所収しか有らぬとしても、全く所収されぬことが重大なる論拠であることを思惟すれば見逃す訳

には往かぬ。本論文に於いての課題は茂明が編者に在ることへの追求であつて、各氏に於かれては可能性の様々の論拠を持たれているとも思惟でき、馳て何時かは文学事典等に於いての『続文粹』の見出し語の説明に所謂「茂明撰」の如くに記す程の許諾ぶりを所期する次第であつて、何れにせよ端的に『書籍目録』の表記を鞏固に信頼貰はんことは回避するべきである。茂明に在つては多分『紙背漢詩集』の成立を拝承、何時かは己れが蒐集たる書冊を編刪せんと決意していたのかもしれない。

『紙背漢詩集』の成立由り数年のうちには『詩序集』が成立するに到り、茂明一篇となるのを拝承して遂に待望窮まるかに、明衡の『文粹』の続編で以つて文章の種類多寡に亘る制覇的書冊をと思気込んだのではと思惟できる。

四 「白雪庭松に満てり」と「酔ひて唯に春を送る」

頃日に到り既に出現している限りに於いての『紙背漢詩集』には、茂明の作品が二篇所収される。確かに茂明の作品が本冊の散佚なきかの状態に於いて計何篇となるかは判明せぬが、本章に於いては其の二篇の鑑賞を独自なりに進めることとする。

追つて『詩序集』の編者は何人かと窺うならば、文章院の東曹に所属する所収作者が十七名で、西曹が五名であることに比して圧倒的に占め、就中、式家藤原氏の作品が十八篇と数多に所収、取り分け明衡の作品が推定作者としての三篇を包摂して末尾に十二篇も聯なり所収され、最も晩くに述作された作品が長承元年である（越前少掾菅原在業・月明妓女家）ことを勘案し

て、編者は本冊に作品が所収されぬ敦光に比定（推定ではあるが）されると、昭和五十（一九七五）年に平林盛徳に抛り指摘された（本冊の複製、吉川弘文館）のである。『紙背漢詩集』所収の茂明二篇の作品を窺う處で、『紙背漢詩集』の相応と『詩序集』、更には『無題詩』と『続文粹』の成立時期や編者を確證することは依然なりと艱險だが、二篇の鑑賞に抛り茂明について人生観等を拝察できればと思惟する次第である。

① 白雪、庭松に満てり

これは本冊巻五第四に所収する十一名の作者に抛つての計十一篇の作品の詩題である。其の第四の詩群は長治元（一一〇四）年十一月十日に詠まれた詩句であることが詩題箇所から瞬時にも判る。其の一篇目は度支員外郎（主計介）の大江家国の七言詩であるが、前以つて「七言冬日於因州員外刺書亭同賦白雪滿庭松詩」と記され、冬の日に因州の会計官の外郎である其の家国の書亭にて挙行された作文会に於いて、作者の十一名が共に「白雪が庭の松一杯に降り積もつてゐる」の如くの詩題で詠んだものである。家国は生歿年未詳の一人であるも、文章生や散位、従五位下を歴任、本漢詩集には家国の詩句が四篇所収されるが、因幡国（山陰道八か国の一）在任中に本作文会が催行された長治元年は、因幡權守重隆や、同族の匡房が歌合を主宰するなど和歌の活躍が誇示された年でもある。本作文会で觀賞する庭の松は一本の松で、書亭の軒先まで張り出して、枝が地面を這う如く伸びており、書亭の庭に格調の高い鑑賞用とし

て調木されたと云われるものである。

さて、茂明の其の詩句は『紙背漢詩集』巻五第四の取りたる末尾十一篇目に所収され、着目すべきに値する作品に思惟できる中、作者には茂明の名ではなく、知明と記される。此れは茂明の初名なのであって、元服前には作文会に同席して詩句を詠んでいたことにもなるのである。元服前の述作が珍しくなかつたにせよ、先験的であるかの述作の才能に長け、年少期由り述作の薰陶を授かつていた筈でもないか。同作文会には乃父の敦基と長兄の令明も参席して同題の詩句を詠んでいる如くであるが、眷族的な鍊磨と違つて此の種の場合は公證な詩会の席上であるから、子息兄弟に周囲由り助言や指導を授けながら進行するものではないと思惟できるが、内心に在つて氣掛かりながらも何て頭角の早いものかと感心、茂明が背筋を伸ばし正座して詠み上げる雄姿に感激して褒め遣る親子愛、兄弟愛を窺わせる側方ではないか。微笑ましく拝観できる光景でもある。

次に本篇の本文と書き下し文を掲げる。

庭松百尺遶欄干

庭松百尺 欄干を遶る

白雪滿來動寸丹

白雪滿來て 寸丹を動かす

栽砌靈標疑月照

砌に栽し 靈標 月の照らすかと

疑ひ

当窓勁節似花攢

窓に当たりし 勁節 花の攢まれ

るが似し

鵝毛点葉応銷緑

鵝毛 葉に点ずれば 応に緑を銷

すべく

鶴警埋枝欲陪寒

鶴警 枝を埋むれば 寒さを倍さ

むとす

君子結交傾蓋友

君子の結交 傾蓋の友

可期此地万年歛

期すべし 此の地 万年の歛

瞥見、元服前とは思惟できぬ成人思考的な文章表現であるが、詠じ始めるに、庭園に聳える松を拠処としてるのが判る。此れは本句題節の他の作者を窺つても同等であつて、本句題が語意するかに本詩宴の操行に前以つて、庭に生息する松を拠処に述作せよとの規則が設けられていることも判る。茂明も其れを意識して従つたことにも、茂明の成人作者と同等に扱われる地位を認められていたことになる。其の茂明が云うには、眼前の松は実視十丈程の高さだが、親木由り分かれたる枝木が長く欄干を取り巻く如くに伸び、枝木には雪が覆い積もり実に素晴らしく感動すると云う。未だ浅薄な人生にも在るかに、雪の覆う松が何ら情感を持たぬものというのが生來の先験的たる考え方もしれぬが、景物を手立てとする營為も必須な筈で、「靈標」であるからには神木たる松である。年少にして神性に頼り生存への境地を開闢せんとする感覚を備えていた茂明にも感心させられぬか。物質を精神で以つて捕捉する観点に立ち、石畳に沿つて植樹されている神木である松は月に照らされているかの如く雪に覆われ、窓にまで伸長する強韌たる貞節が雪を帯び、花冠が集まっているかに観えている。普遍して本詩宴が催行さ

れているのは昼間で、月の光の照射する夜間と同等に看做して
もいる。実視すれば昼間の雪に覆われた松のほうが遙かに明る
く見栄え、茂明も其れを承知の上で譬える中、未だ年少期の者
が夜間と同一化する視座には一種の茂明の成人者も圧倒するか
の思考力が窺えるのではないか。各々、「月」「雪」「松」に亘
る自然景物の同一化を成し遂げた元服前の茂明と云えて、就中
「花」をも同一化している。松にも花実が生成するが、「花」は
根や枝葉、芯木でもなく花実や花弁、花冠の如くに云う花卉、
花木の成熟附着部で、転じて「花」は成就の象徴でもあつて、
人が厳冬に譬えての困苦を超克して宏春を迎える如くの功績を
修めんとする發展的精神を表わしている。毅然に人性に在る茂
明は動物の「鵝鳥」にも着眼する。動物に譬えたと云うことに
抛り元服前の者に相応しく、鵝鳥の偏平足風な歩き方と惚けた
溜息風の鳴き方に関心を惹くかに、動物が恰も輩ともからであるかの親
近感を持つのが年少期の特徴であるが、此処では非人たる動物
を対蹠に同一化しているのである。だが其れは人性ではない。
「鶴」も然りだが、鵝鳥の白い体毛の如くの雪が松葉に散らばつ
て、緑の色彩を跳ね除けてしまふそうだ。恰も鶴の白い羽で
織つた着物ですっぱり埋められているかに観ると、最早肌身で
以つて体感する寒さは月の光で突き刺さすかの寒さでは済まざ
れずに鵝鳥の白さを凌駕して増し、非人が齋す不徳を排除せ
んとして君子に救援を求めんとする。而して人性に接合し、遂
には茂明自身にと接合する。毅然にも融合せんとして、其処に
在る人性が「傾蓋の友」である。鳥や獣でもなく非生命体にし

か有らぬ車体の幌こそ凌駕しての孔子と程子との親密な語り合
いであつて、自律と他律との所謂社会性である。其れが社交の
場の典型たる文亭にて他の参席者との語り合いに抛り眼前に事
実化されているのであつて、其の究極感情こそが「欲び」であ
る。歓喜たる情感こそ恒久に続いて欲しいと懇望、来者をも見
据えることに抛つての論駁が往き渡っている。何とも完成度の
高い作品であることか。茂明には自我同一性が確立している。
若年に在りながら成人作者と全く引け目を取らぬ述作ぶりには本
漢詩集に選定、所収されていることに抛り確證できるものでは
ないか。作者のみでなく、編者という大役を担つたかもしれぬ
茂明の述作の才能ぶりは既に萌芽していたのである。

② 酔ひて唯に春を送る

此れは『紙背漢詩集』巻十第四十九に所収する十五名の作者
に抛つての計十五篇の詩題である。其の第四十九の詩群は元永
二（一一一九）年三月晦日に詠まれた詩句であることが詩題箇
所から瞬時にも判る。其の一篇目には学生藤原守光の一篇が有
る。守光は何れに従五位上や大藍物を歴任するが、既に老年に
在つた承安三（一一七三）年、重病にもめげず薩摩由り釈奠に
馳せ参じたが、釈奠は終わつており虚しさに駆られたという説
話が橘成季著『古今著聞集』に記述される。其の守光の五十四
年遡つての詩宴で詠んだ本漢詩作品には「七言三月尽日於藤茂
才文亭同賦醉中唯送春詩一首」と抛出が記述される。元永二年
の其の詩宴は何と茂明の文亭にて催行されたのである。十五篇

目は出自・生没年未詳の守賢という作者の詩句であるが、其れに続いて本詩宴の出題者は翰林(文人仲間)主人となっているので茂明であると思惟される。粗大役づくしかに観て採れる茂明は、生年を寛治七(一〇九三)年に仮定すれば数え二十七歳の時に主宰する詩宴でもあって、若年期のうちには大役を任じていたことにもなる。予て元服爾前には既に文才を開闢、成人期に在っても頭角の早い茂明ではないか。

『紙背漢詩集』卷十第四十九には其の十一篇目に茂明の作品を所収する。茂明名義の直ぐ上部には学生の肩書が有る。必要限、本詩宴の催行された時点の茂明は学生だったことが判るが、中古期に在っても学生は学ぶ者を意味すると云つて好く、林鶯峯も叙べる如く茂明も藤原氏の営為する大学別曹たる勸学院にて日々鍊磨していた。其の甲斐在つてか、茂明は保安三(一一二二)年には文章得業生に及第するのである。此れに拠り官吏登用考試の最高段階である秀才・対策の応試候補者の枠域に入つたこととなり、多分本詩會にて詠句したことが候補者推挙の理由の一端に在つたかもしれぬ。茂明は而して二年先の天治元(一一二四)年には対策に及第することとなる。茂明には保延六年に到つて式部少輔に任命されるという官吏の地位が認められ、且つ茂明自身も書写した経験の在る『白氏文集』を同六年に嫡男敦真に伝授しており、而して想起する条件は同六年に『続文粹』が成立した如くの推定である。只々も確證には往かぬのであるが、従五位下の地位の者が学事と併行する分には周辺環境に余裕もあるかの好適な程に思惟しながら、茂明の保延

六年の動向、某か『続文粹』の編者確定の気配が漂いもしなくはないか。
次に本篇の本文と書き下し文を掲げる。

何耐酔中感緒并

何ぞ耐へむ 酔ひて 感緒 并ま
るを

送_レ春唯動_二悵望情_一

春を送るは 唯 悵望の情を動か
すのみ

霞消数盞頻巡処

霞 消え 数盞 頻りに巡りし処

日落十分未酬程

日 落ち 十分 未だ酬せざる程

飲飲相催花散色

飲飲 相に催す 花 散りし色

酣歌被_レ勸鳥帰声

酣歌 勧めらる 鳥 帰りし声

独慙今接_二好文席_一

独り慙ず 今 好文の席に接し

一句詩篇忽尔成

一句の詩篇 忽ちに尔か成れるを

数え二十七歳で己れの文亭にて詩宴が催行される。頭角の早い茂明に在るのだが、思考感覚についても何て人生を窮めていることか。茂明は頸聯に於いて「感緒」と記述している。情感が様々に遷り往くという。「感緒」の語の相応は、既に大江匡衡の文集である『江吏部集』卷下(寛弘八・一〇一一年頃成立)に所収する応製詩の典型で、長保二(一〇〇〇)年十月の新内裏の完成を賀す席上で匡衡が詠んだ詩句に、祝賀するに擬して飛来した燕と雀の情感として記述される。茂明に到つては『紙背漢詩集』所収の本詩句を経て、『無題詩』卷二所収の応保二

年頃の成立である「六月の祓」の茂明前篇に於いても「感緒」の語を用い、水無月の大祓の夜に涼しい風が飄々と吹き、自ずと様々に「感緒」が催し耐え凌げぬと抒べ、同冊巻三に所収する「八月十五夜の月に翫ぶ」の茂明前篇に於いては類似する「愁緒」の語を用いて悲しみが込み上げて来るとも抒べる。同冊巻五に所収する「賢才、諸を興えて志を云う」に於いては再び「感緒」を用いて、其れは朝になる迄移り変わるものだと抒べるが、如何なる喜怒哀楽と経過を問わず、「感緒」の語は感動と情緒を表わしており、而も事物事象を感得して本能的に表われる如くの感情の動きである。「感緒」たる情動は茂明が元服前に詠んだ「白雪、庭松に満てり」結聯中の「万年歡」と邂逅し繋がるものでもないか。『無題詩』に謁見する茂明は決して揚々たる情感、情動のみには在らぬ。即事詩では有らぬが、譬え夏日の熱暑を避け木陰に快楽を求め、苦界を逃避し隠遁に安寧を乞い焦がれんとも、秋日を風雨の盾に捕るならば嚴寒の冬日に遭遇、老年の明衡の如く世中と我が身の悲哀を悟り悶々たる懐悔の想念に苛まされていた。悲哀であつてはならず、元服前の染まらぬ目線にも抜がっていた積雪を冷淡、冷酷な風物ではなく実に有る趣深きものと感動することに拠り、はや冬日の困炉裏端に歓喜を持たせ、春日を俟たねばならぬのである。歓喜の想念こそ「感緒」の主格であると共に復、「感緒」たる全容性を来者に亘り継承発展させ、必ずや訪れ得る世中社会の完成を目標とする営為の糧とせねばならぬのである。

だが皮肉なことに、茂明は「愁緒」にと侵蝕されて往くかの

如く「感緒」に耐えている。毅然に各様の感情が相互に作用し合っている状況でもあるから、快楽や歓喜の情念とて耐え忍んでいることでもないか。本詩宴に於いては肩身を狭窄に垂れて淑やかなりと同席した茂明は元服前由り有徳に養育され、節制の効く謙虚な人物であつただろうが、殊に公的の席上に於いての燥ぎ過ぎは禁物の筈で、嘲笑や憤怒の情感も露呈してはならぬ筈である。詩宴に酒水は付きものであるが、此れとて快闊迅速に詩句を詠じる強壯剤に有る筈で、酒水に情緒が汚泥され抑制さえ困難の程に、詩作に影響を及ぼす如くであつてもならぬ。気拳動して喧騒、暴虐にと露呈する虞もある。德行たる人格者に信託すべき茂明も斯く云う事態にはならず、本席上に於いて飲酒が進捗しなかつたことに拠り情緒が耐え凌いだとも云えるのではないか。本詩宴催行の時点に於いて茂明は学生で在つたが、其れは「がくしょう」と読む官職的な地位と云い得、頃日に云う庶民層が圧倒を占め威厳性を欠いて何時までも稚拙染みたる者たちとは異にすると云つて好く、職業的感覚も強朝の中の参席でもあつた筈である。確かに数え二十七歳も未だ若い。常日頃由り周囲には茂明の頭角の早い素質を妬む如くの不仲も在つたかもしれない。前年の元永元年は各地に飢饉が発生し京中に餓死者が横溢した時世でもあつて、冬日に案じながら本朝の安寧を懇願し冀望に膨らむ春日を迎えた筈であるのに、春の時節は人を俟たずして過ぎ去つて往く。歓喜や快楽の想念に浸り安住していても居られぬのである。畢竟、茂明の情感の飾に

繋るのは悲哀である。哀れに想う餘平靜さを保てず、背けた眼下に映ったのが遠くに拡がる風景である。振り返り観ると、此処には詩作に追われる茂明自身が居るではないか。美しい夕焼け雲は時を俟たずして直ぐに消え隊せ、幾杯もの盞が頻りに廻つて来る。臙脂に色濃く見栄える夕陽も沈むにかかわらず、未だ十分な詩句を詠めず酒水を飲み干すことができずに居る。

周圀は秀逸たる詩句を仕上げ、呑んでは茂明の我を見下げて居るのだ。肩身を狭隘に意気消沈たる想いの其の向こうの軒先の庭園では花が舞い散り、周圀は酒水を嗜み鼻高々に詠唱すれば鳥にも帰巢を把促するまで、鳥さえも声弾ませるかに鳴きながら癖に帰つて行くではないか。其れに引き換え己れは恥辱に耽溺している。周圀の方々は立派な上司たる文士である。貴重な詩宴に同席しながら、己れの詩句が諸兄の如くに直ぐに仕上がらず、斯くなる拙い詠詩にもなつてしまったことを。本詩会が茂明の己れの文亭で催行された如くの責任も実感していたことだろうが、飲酒として進捗せぬことで情緒の功を奏したかに、茂明は己れの詩作の淡泊ぶりを覚知するも、周圀の同席の高名たる顔ぶれが居合わせることで認知的不協和の思考状況を抑制することに拠り謙遜の意を表している。集団的作用は奏功して、己れの劣勢ぶりに肖り目上の文士を氣遣う温和な情緒の側方を表する茂明でもないか。「感緒」に可能性を秘める茂明の社会性としても確認できるのである。而して「感緒」を抒べた茂明という点、此れも『続文粹』の編者に推挙できる理由になるのではないか。ともすれば悲哀的、衰微的な語感の「愁緒」をも

包摂できるかもしれぬ。呉々も茂明が編者であるとする確證にはならぬが、多情多感なる観念性について抒べたことにも大きい。

五 『本朝無題詩』と茂明

『本朝無題詩』は文人の庇護者であった撰政関白の忠通が晩年、側近の式家儒者に命じて所謂「無題」の詩句を一冊に纏めることを企図し、応保二(一一六二)年から長寛二(一一六四)年の頃には成立したかと推定される蒐集である。忠通の側近の式家儒者が誰であったのかは未詳、同冊には茂明の作品が五十七篇所収されるのだが、瞥見、「無題」と云う語感の響きに何を思惟するか。何某か虚無的、厭世観的な宜しからぬ印象を受けるかもしれないが、詩題の無き客観性にも推度しながら、既に中古期に於いて「無題」の狭義的語意が有る。最近では佐伯雅子も確認している(『本朝無題詩の無題』国文学研究資料館リポジトリ)が、「無題」の概念は大陸に於いて晩唐李商隱(元和七・八一―大中二・八五八年)あたりに確立したらしく、日本に於いての其の概念は天慶二(九三九)年以降成立の『作文大体』勅韻事や、弘安元(二二七八)年成立の文章指南書『王沢不渴鈔』(上巻、無題条)等に、「無題」というのが「句題」(いにしえの五言七言詩の中から適当な詩句を取りだして題とするもの)の概念に対立するもの、句題ならざるものが無題であると叙べている。印融の『文筆問答抄』に拠れば句題は普通五字、無題は六字・七字、例えば「三月三日偶吟」・「春日於海

「辺即事」の如きもの、更に三字・四字の題は非句題である。『無題詩』を観る限りに於いては「無題」の語意に相応しいかに規則性を全きに乖離し、汎く「詩題」が各作品の冒頭に記されており、「涼」という一字を始め、五字もあれば六字・七字も有つて、十字、二十字を潜り抜けて最多には茂明の実父でもある敦基の作品の詩題が句読点をも数えて計七十六字に及ぶ。敦基の其れは桑園の農夫の家に赴いて、模様のように桑畑が鮮烈で其の傍側の流水が潺湲に渡る中、飲酒を勧めながら奇策に談話、歓楽に過ごすうちに夕刻が訪れ友好に収まったという、如何にも気品に横溢し敬虔で社交も難行なきかの性格に窺える敦基が練り抜ける話題性のもので、恰も詩題の相応が作品本文であるかに、七言八句から成る本文も眼下に抜がる麦田の収穫期の初夏のことである等を叙べながら、七十六字の詩題内容とも大筋沿っているものであるが、『無題詩』には特に詩題の字数を問わずに作品が所収されるのであって、従来の「無題」の規則性とも捕捉されずの一種の自由裁量の撰集方針であったことに思惟できる。大半の作品が同一の詩題に有ることで、ともすれば詩題が全く無きかの平坦な印象に拠り「無題」と称え、其れを基盤に婉曲的、客観的な高所性を企図したのかもしれないが、鷲峯は明衡の『文粹』や『無題詩』も典拠として作品を所収する『本朝一人一首』巻六に於いて『無題詩』の書名について、編輯が一応終わっても題が附けられなかったのではと、其の儘『無題詩』と名附けたかと云う。川口に拠れば『無題詩』成立の凡そ四十年前前に編輯せられた『紙背漢詩集』と対蹠的な無題

の蒐集に即しての命名であるかと云う。確かに『紙背漢詩集』の詩題は凡そ五字の句題の辺り由り十字程度以内に特徴なく聯なり、詩題に字数制限の無いこととなる『無題詩』こそ『無題』を定義するに相応しいかに、客観的高所に立つての作品蒐集ではないかと思惟する次第である。呉々も文章編纂書とは異にし、延々と七言詩のみが聯なり続く単調ぶりさえ指摘せざるを得まいが、強いて『無題詩』を成立時期の先行する『続文粹』の發展書冊と看做すことも可能かもしれない。

『無題詩』には三十名の作者の計七百七十余篇の作品に拠り所収され、茂明の作品は五十七篇で本冊作者の五番目に数多いのであって、因みに五十六篇の釈蓮禪に続いて明衡が四十七篇で七番目、くだって季綱が十六篇で十七番目である。斯くに聯なるも留意すべき点は、忠通は編纂を関係者に命じたらしきになつて自身が『無題詩』の編者には在らぬことではないか。編者は未詳なのであって、而して五十七篇所収の茂明は『無題詩』での編者の可能性は如何程かと思惟するが、矢張り確證するとなれば艱険である。他者連続性である分には五番目であるから、茂明が知名的により高い作者であることに観て採れ、而して篇数の許多の作者に在るも周光や忠通の程には繁忙に無きかに拠り『無題詩』の編者を担つたのかもしれないが、『無題詩』の成立が応保から長寛の頃で丁度茂明の人生の最も窮めた時期と一致するから、『続文粹』と云う然りも寧ろ『無題詩』としての編者である可能性が高いかもしれない。だが川口は叙べていぬも『続文粹』の編者が匡房であるかの如くと同等に、所収許多の

作者であつては主観性の強靱なことを否めぬものではないか。事実、五十七篇の作品の中身を窺つた處で茂明が『無題詩』の編者であるとする主観的記述すら何処にも在らずの訳であつて、拠つて茂明作品が全く所収されぬ『続文粹』に遡求すれば、發展書冊かの『無題詩』に五十七篇所収されたことで茂明自身が具象化されることに拠り、『続文粹』の編者に在るものでもないか。斯くの如く思惟するも、『続文粹』の成立が保延六年頃の推定に在るから『無題詩』の成立由り二十年程も爾前となり、周囲には協力者の尽力も在つただろうが、茂明は四十路に在つて未だ人生を窮めていぬ時期と觀て『続文粹』の編者である可能性が粗陋ともなる。現状、『無題詩』に在つても『続文粹』に在つても茂明の撰と記すべく手立ては、意見性の学説、補説に徹して一般化ならしめる以外に在るまい。編者未詳に在るからこそ普遍的事実の判明をも見込み、見込みとて包摂することに拠り茂明についての関心事は尽きぬものと確信する次第である。

まとめ 長兄を見込んで

依然として茂明が『続文粹』の編者に在るとの確證に到らしめる裏附けが艱險なのだが、意見性の因子として本論文に於いて先驗性由りの才能、篇数順降の過程性、「感緒」たる思考性、保延六年の動向、『無題詩』に到つての具象化の如く、複数に亘り抽くに得た。拠つて最早、茂明を『続文粹』の編者であると確言、明記することを要求する次第である。『書籍目録』の

如くの主観性を排斥せねばならぬ筈なのであるから、「茂明撰」と表記する如くの特異性こそ普遍性の筈である。

斯くの如く思惟するも、長治元年の詩会に茂明は乃父と長兄との三者で参席して居る訳で、其の長兄の姓名は藤原令明。よしあきら。明衡の嫡男たる藤原敦基と、明経道中原氏に在るかの季成娘に云う女史との実子に確定するのは茂明と令明の両者であつて、茂明の実の長兄たる含意で以つて令明と記述する次第である。『れいめい』とも読む。式家の人脈組織の光条に一際煌めいて、中古末期とは信じられぬかの何て統率力の漲る新衛的な人名であることか。『りょうめい』と至高な読み方を與えても好いのではとも思惟する次第である。令明たる長兄が居ることも、舍弟に在る茂明が『続文粹』の編者に威勢を上げて推挙する条件に数えられるかもしれない。だが兄弟分かち合うかに、令明の作品も『続文粹』に一篇も所収されぬではないか。私にとつて新たな中心課題が湧き起こる。

註

- 1 川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究』一九九〇年三訂下再販八五一頁。
- 2 佐藤道生『平安後期日本漢文学の研究』二〇〇三年初版第一刷第二章。
- 3 藤原正義「周光・茂明論―本朝無題詩考―」北九州大学文学部紀要第二二七頁。
- 4 『本朝無題詩』卷一「賀勸学院修造新成」

- 5 林鶯峰編『本朝一人一首』所収「勸学院修造新成を賀す」の鷺峰記述の評伝部。
- 6 本段落は粗、前掲論文「周光・茂明論」の十五～十六頁に拠っている。
- 7 同論文十七頁。
- 8 同十七頁。
- 9 総社市の句碑については園田学園大学等のブログに掲載。
- 10 後藤昭雄『大江匡衡』（二〇〇六年、吉川弘文館）九四頁～九六頁。
- 11 前掲書佐藤二二九頁。
- 12 前掲書川口九〇二頁。

追記

藤原氏等の家系や地位については『尊卑分脈』、『公卿補任』（何れも国史大系に所収）等も参照されたい。

参考文献

- 岡田正之『日本漢文學史』一九二九年、吉川弘文館
- 増保己一編『群書類従・第九輯―文筆部・消息部』一九三二年、八木書店
- 国史大系第三〇卷『本朝文集』一九三八年、吉川弘文館
- 国史大系第二九卷『本朝文粹・本朝續文粹』一九四一年、吉川弘文館
- 国書刊行会編『正續本朝文粹』一九四四年、前野書店

川口久雄『平安朝日本漢文學史の研究・下篇』一九六一年、明治書院

日本古典文学大系69『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』一九六四年、岩波書店

川口久雄『大江匡衡』一九六八年、吉川弘文館

山岸徳平『日本漢文学研究』一九七二年、有精堂

岡山県高等学校教育研究会『岡山県の歴史散歩』一九七六年、

出川出版社

藤原正義「周光・茂明論―本朝無題詩考」一九七九年、北九

州大学文学部紀要第二二号

大曾根章介「本朝続文粹の異本」一九八七年、中央大学文学

部紀要第一二二号

新・日本古典文学大系27『本朝文粹』一九九二年、岩波書店

新・日本古典文学大系63『本朝一人一首』一九九四年、岩波

書店

大曾根章介『王朝漢文学論攷』一九九四年、岩波書店

佐藤道生『平安後期日本漢文学の研究』二〇〇三年、笠間書

院

後藤昭雄『大江匡衡』二〇〇六年、吉川弘文館

中村璋八・伊野弘子訳注『中右記部類紙背漢詩集』二〇一

一年、汲古書院

(まつだ・かずあき 二〇一六年学習院修了)